

河川・水の学びはインフラの自分事化への自然な呼び水になる



藤田 光一
依頼論説
国立研究開発法人土木研究所
理事長

「河川・水の学び ～生きる力をのばす教育」(公益財団法人 河川財団 著)が昨年発刊された。私は、副教材としての位置づけではなく「河川・水の学びが初等中等教育の本流を構成しうることの提示」にこそ本書のねらいがあると捉えている。現行学習指導要領の名付け「生きる力～学びの、その先へ」と本書副題との符合を、その象徴と見る。

では本流とは何か？ それを、小学校学習指導要領解説 総則編から以下に抜粋し私なりに繙いてみる。

- ・ 育成を目指す資質・能力を、ア.生きて働く『知識・技能』の習得、イ.未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成、ウ.学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養、の三本柱に整理。
- ・ 子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするための「主体的・対話的で深い学び」。
- ・ 学校は地域社会を離れては存在し得ない。児童は家庭や地域社会で様々な経験を重ねて成長。地域社会の現状はもちろんのこと、歴史的な経緯や将来への展望など、広く社会の変化に注目しながら地域社会の実態を的確に把握。

以上から明確に伝わってくるのは、第一に、大望であり、大人にとっても挑戦的で、日本の重要課題を見据えていることである。第二に、学校だけでは完結せず、社会に開かれた教育課程、社会そして地域との連携・協働を掲げていることである。第三に、[知識・技能⇄未知の状況や課題へのアプローチ⇄学びを生かすことの社会的意義ひいては自らの人生を充実させることとのかわり]の“回路”の創生と活性化が必須で、知識・技能を後二者に活かす指導法とその題材が求められることである。教科横断的に捉えるべき、複数のまとまりの中で物事を全体的・統合的に捉えることに資する題材が重要になる。

こうして見通せる学校教育の本流に鑑みて、私は、河川・水の学びがそれを実質的に支えるにふさわしい特質を持つと考える。なぜなら河川・水は、1)流域圏単位で水・物質循環系や流砂系などのシステムを、もって膨大な要素からなる有機体を構成し、2)理学から工学、文学、芸術、体育に至るまで数多の教科や学術分野とのつながりを持ち、3)国土に遍く、したがって学校の近傍に必ず存在し、4)地域性が強く、ゆえに多様であり、他方普遍性も併せ持ち、地域密着でありながら地球規模とも通底する課題が内包され、5)低学年での水との触れあいから始まり、高学年では理科や社会の題材になるなど、各学年に合った活かし方が可能で、6)複数の価値が並存し、それらの対立や調和という構図を内包し、7)個人、家族、コミュニティひいては地域社会との実体的なかわりがあり、それは先人、祖先とのつながりにもおよび、8)自然と人間とのせめぎ合いの中で人間が生き延びるための闘い方、近代化以降は人間が自然と折り合いをどう付けるか？という問いが人間社会存立の本質に関わって連綿と引き継がれ、9)知恵を出し合いながら時代に即して課題解決を図る実践の場になる、からである。

さて、インフラストラクチャーである。素の地球は野性的で、人間社会が持続的に発展でき、自然の恵みを享受しつつ、誰もが、思慮深い国土の使い方を追求しながら、安心して生き生きと暮らせる社会の実現に向け、地球と人間との間に“インターフェース”や“クッション”が不可欠で、それこそがインフラである。河川・水もその地球を構成し、当然インフラ整備の土俵となる。そして、総合工学である土木技術がこれを支えてきている。こう捉えた時、地球・国土～インフラ～人間社会の総体的関係性からの学びには、河川・水の学びを包含して学校教育の本流をさらに発展的に支えるポテンシャルがあると言える。そして、子供の成長の道程においてこの総体的関係性を活かすことは、インフラの重要性を直接的に訴えるアプローチからは迂遠のようだが、インフラを自分事と捉え深く継続的に考える自発意志の自然な、であるがゆえに確固たる醸成に結果としてつながるのではないか？

子供たちの成長の可能性に大きな希望を持ち、その発現に真摯に取り組んでいる人たちに共感しつつ、押しつけではなく、インフラという存在が持つ教育的価値に改めて目を向けてみてはどうか？ それは利他行為にとどまらず、土木技術者がインフラのあり方を捉え直す契機にもなるはずだ。